金融・経済おもしろ豆知識

古今東西、昔から伝えられているおとぎ話から現代の映画やマンガまで、お金や経済にまつわる物語は数え切れないほどたくさんあります。今回は歌舞伎、映画、小説などで広く知られる物語を取り上げます。

第3回

物語「忠臣蔵」

潤沢な軍資金こそが、武士の気概を支えた？

吉良上野介（こうずけのすけ）の度重なる嫌がらせに端を発し、ついには刃傷におよんだ浅野内匠頭（たくみのかみ）。一方的な加害者扱いで切腹した主君の無念を晴らす赤穂四十七士の仇討劇。ご存じ「忠臣蔵」は、300年以上前に江戸城松の大廊下で実際に起こった刃傷事件「赤穂事件」を題材に、歌舞伎や人形浄瑠璃、映画や小説など幅広いジャンルで描かれている冬の日本の定番の物語です。

刃傷事件が起こり、内匠頭が即日切腹となったのが元禄14年3月14日（新暦：1701年4月21日）。そして大石内蔵助（くらのすけ）をはじめとする赤穂浪士が吉良邸に討ち入りをしたのが元禄15年12月14日（新暦：1703年1月30日）。吉良の首級を上げるまでの約1年と9カ月、この間に藩はお取りつぶし、城は明け渡しとなる中で、その軍資金がどのようになっていたかは気になるところです。

大石内蔵助は浅野家筆頭家老として藩の財政を十数年担当していました。この大石が残した記録「預置候金銀請払帳（あずかりおきそうろうきんぎんうけはらいちょう）」によると、赤穂浪士が討ち入りに必要とした軍資金は約700両。現代のお金に簡単には換算できませんが、おおよそ1両10万円とすると7000万円といったところでしょうか。この軍資金はどのようにして捻出され、何に使われたのでしょうか。

収入源は、藩財政を整理した後の余り金に加え、内匠頭の奥方が赤穂の名産である良質な塩を生産する塩田に貸し付けて運用していたお金もあったようです。

一方、支出については、江戸での活動拠点となる屋敷の購入や武器購入などに充てられましたが、一番多かった出費は、江戸と上方を往復するための旅費と滞在費、次いで、藩が消滅して収入のなくなった浪士達の生活費補助となっていて、これらが軍資金の半分以上を占めていました。

『武士は喰わねど高楊枝』とも言いますが、武士にも生活があります。士気を維持させて脱落者が出ないように、または、お金が尽きる前に焦って討ち入らないように、生活費を与えながら、じっくりとタイミングを待ったのです。

藩の滅亡後、残されたお金と人をしっかりコントロールし、討ち入りという目的を果たした大石のマネジメント能力は大したものといえますね。

参考資料：「赤穂浪士と吉良邸討ち入り」吉川弘文館、
「『忠臣蔵』の決算書」新潮新書ほか